意味不明状況と想起される記憶イメージの関係

下田 浩子

(京都大学大学院医学研究科)

キーワード: 記憶イメージ 意味統合 意味不明状況

Retrieval and memory image of incomprehensible situation in Memory Task Performance

Hiroko SHIMODA

(Kyoto University, Graduate School of medical science)

Key words: memory image, abstraction, incomprehensible situation

目 的

情報は相互に関係づけられて記憶される。長期記憶においては、意味情報を中心として貯蔵されていると考えられている。意味内容を理解して記憶する方が、逐語的に記憶するより保存性が高いとされている。通常文章などは、意味内容として理解されて記憶される。しかし、一方で、意味内容が理解できない支離滅裂な文章については、意味情報として貯蔵できない可能性がある。このような意味不能の文章については、統合記憶とは異なった条件が影響すると考えられる。

一方、人の感情状態が記憶に影響することが知られている。意味不明な文章だけでなく、人の心理を荒立てる文章の記憶についても、意味内容の理解だけではなく、感情処理が大きな影響を与えると考えられる。

したがって、人に嫌悪感を与え、理解不可能な文章については、意味統合を行うことが充分できずに正しく記憶できない可能性がある。この場合は、1) 感情的になったために、記憶処理において情報処理ミスが発生するとともに、2) 文章の各部分の関連性が充分に理解されないため、意味統合処理においてミスが起こると考えられる。

このように、部分的には正しい文章ではあるが、統合すると部分的に意味理解が難しい支離滅裂な文章を作成して、理解不可能な状況での記憶情報処理を検討する。

方 法

研究対象：心理学の授業を受講している女子大学生

課題：記憶テストを行うと告げ、課題を教室前のスクリーンに提示した。8 個の文章をまず順番に提示した。その後、それらの文章を組み合わせた 3 文を順番に提示し、1) それぞれの文章が先ほどの 8 個の文章に内容が合っているかどうか、2) それぞれの文章の内容について加害者(太郎)と被害者(犬)に対する感想を書いてもらった。文章の内容は、加害者(太郎)の不可解な行動とその被害者(犬)についての記述で、文章 1, 2, 3 となるほど情報が増える。

感想の分析方法：感想内容をまず、イメージの主題(行動レベルか、性格レベルか、感情か)を分析し、さらにイメージの内容によって分類した。

結 果

感想のイメージ内容は、太郎に対しては恐怖、拒絶、非難、分析、賛同のイメージが記述され、犬に対しては、批判、分析、同情、賛同イメージが記述されていた。

更に、情報が増えることによって、太郎や犬に対する感想の比率がどのように異なるかをグラフに表わした。太郎の感想は行動イメージが多く、犬への感想は図 1 に示すように感情イメージが多かった。また、図 2 に示すように太郎への非難と分析イメージが多く、図 3 に示すように犬への分析と同情イメージが多かった。

図 1

図 2

図 3

考 察

本研究で用いた文章は、各部分は意味記憶可能であるが、統合すると不可解で客観的事実として統合記憶できない。したがって、情報が増えても、むしろ感情的イメージが広がっている。被験者は加害者に対して客観的立場で記憶を試みているにもかかわらず、非難イメージを持っている。しかし、被害者には感情的で、同情イメージが高い。したがって、不可解で不快な行動に対して客観的に非難し、被害者に対して感情的で親和的である。理解不可能な状況での記憶は、感情が記憶に大きな影響を与えていると考えられる。

引用文献

Bransford, J.D. & Franks, J.J., 1971, Abstraction of linguistic ideas. Cognitive Psychology, 2, 331-350.
(SHIMODA Hiroko)